琉球大学学術リポジトリ

[研究会抄録]第4回沖縄ウイルス研究会講演要旨

メタデータ	言語: 出版者: 琉球医学会 公開日: 2017-08-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017080

第 4 回沖縄ウイルス研究会講演要旨

日　　時：平成 26 年 12 月 2 日（火）
会　　場：ANA クラウンプラザホテル沖縄ハーバービュー
　　2 階『金鶏の間』
当番幹事：上里　博（琉球大学大学院医学研究科皮膚病態制
　　御学講座　教授）

〈開会の挨拶〉

上里　博
（琉球大学大学院医学研究科　皮膚病態制御学講座　教授）

〈特別講演〉

特別講演 1.
座長：田中　勇悦
（琉球大学大学院医学研究科　免疫学講座　教授）

「HTLV-1 感染症に対する免疫療法」
演者：神奈木　真理
（東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科 生体環境応答学系　感染応答学講座　免疫治療学分野　教授）

ヒト T 細胞白血病ウイルス I 型（HTLV-I）感染は、長い潜伏期の後、感染者の一部に成人 T 細胞白血病（ATL）や HTLV-1 関連脊髄症 / 熱帯性痙性対麻痺（HAM/TSP）をおこす。急性型 ATL, リンパ腫型 ATL は化学療法に抵抗性を示し再発しやすく予後不良である。近年、化学療法に加えて同種造血幹細胞移植が行われ長期生存例が経験されるようになった。また、日本で開発されたヒト型 CCR4 抗体（モガムリズマブ）が ATL 治療薬として加わり治療選択の幅が広がった。慢性型 ATL、くすぶり型 ATL の進行は緩徐であり経過観察が基本となっているが、経過中に急性型 ATL への転化がある。現在、慢性型、くすぶり型 ATL に対し AZT/ インターフェロン（IFN）α 併用療法の治験が行われている。HAM/TSP の治療には IFNα、ステロイドが使われる。

ATL に対して一定の効果を持つ治療には、いずれも免疫学的な機序が関与する。造血幹細胞移植後の ATL 患者では HTLV-1 特異的細胞傷害性 T 細胞（CTL）の活性化が認められ、移植片対宿主（GVH）応答とともに抗腫瘍効果に貢献すると考えられる。モガムリズマブは ATL 細胞表面に高発現している CCR4 に結合し抗体依存性細胞障害を誘導する他、制御性 T 細胞を減少させ抗腫瘍免疫を増強する効果も期待されている。AZT/IFNα 併用療法の機序は長らく不明であったが、IFNα による Tax 発現低下に伴い p53 経路が回復し AZT により apoptosis が誘導されることが最近分かった。

ATL 患者では、Tax 特異的 CTL は検出できないかまたは少なく、あっても抗原刺激に応じた活性化が認められない。我々は、Tax 特異的 CTL の主要認識エピトープのアミノ酸配列を同定し、このペプチドを用いて CTL 応答を増強する抗 ATL ワクチン療法の開発を行ってきた。平成 24 年頃から九州がんセンター、九州大学、東京医科歯科大学の共同で、既治療の ATL 患者を対象に Tax ペプチドを添加した自家樹状細胞ワクチンの臨床試験研究を進めている。これは、今後 ATL 発症予防方法としての可能性も含んでおり発展が期待される。

特別講演 2.
座長：上里　博
（琉球大学大学院医学研究科　皮膚病態制御学講座　教授）

「帯状疱疹 ～診療上の注意点と最新の疫学調査～」
演者：浅田　秀夫
（奈良県立医科大学　皮膚科学教室　教授）

水痘帯状疱疹ウイルス（VZV）は初感染で水痘を引き起こす。水痘治癒後、VZV は神経節に潜伏感染するが、宿主の免疫低下などをきっかけに再活性化して帯状疱疹を発症することが知られている。米国においては、水痘ワクチンの力価を高めたワクチンを用いて、大規模臨床試験が行なわれた結果、その有効性が明らかとなり、帯状疱疹予防ワクチンとして高齢者を対象に使用されている。一方わが国では、水痘ワクチンを高齢者に接種すると VZV 特異的細胞性免疫の増強効果が得られることが知られているものの、未だ「帯状疱疹予防ワクチン」としては承認されていない。

従来から帯状疱疹の発症抑制には、VZV 特異的細胞性免疫が重要であろうと考えられてきた。しかしこれまで、免疫がどの程度低下すると帯状疱疹を発症するのか？液性免疫も予防に関わっているのか？などについては明らかなデータがなかった。近年、われわれ

は香川県小豆郡において 50 歳以上の住民 12,522 人を対象として、帯状疱疹の発生頻度、発症者における痛みの程度と持続期間、VZV に対する細胞性免疫・液性免疫と帯状疱疹発症リスク・重症度との関係、免疫の持続期間などを調べる目的で、大規模な前向きコホート研究を行った。その結果、細胞性免疫の指標である VZV 特異的皮内反応の程度と、帯状疱疹発症率、皮疹・疼痛の重症度、帯状疱疹後神経痛発症率が逆相関することが明らかとなり、一方、VZV 特異的抗体と帯状疱疹との相関は認められなかった。本講演では、小豆郡における疫学研究を通して得られた帯状疱疹と宿主免疫に関する知見を紹介するとともに、頭頸部領域帯状疱疹の合併症として注意を要する眼合併症とハント症候群について解説を試みた。

〈閉会の挨拶〉

上里　博

（琉球大学大学院医学研究科　皮膚病態制御学講座　教授）